

「光を目指して」

山形県南陽市立宮内中学校

一年 菊地 士道

「カーソルが無い。」
パソコンで動画を見るのが好きだった僕はあせりま
した。何度もスクロールしたけれど、どこにあるか
わかりませんでした。

僕は、小学校三年生の時、両視神経炎という目の
病気になってしまいました。それは突然の出来事で
した。

最初は、少し周りがぼんやりしていて黒板の字も
見えにくいだけでしたが、次の日、宿題の算数のドリルに何が書いてあるのかわからず、真っ黒の中に白っぽく何かがつついているだけで何にもわからなくなっていました。

父が算数のドリルの問題をカレンダーの裏に大きく書き、虫めがねを持ってきました。虫めがねを通してぼんやり見えるぐらいでした。その時の僕は、信号の色すらわからない状態になっていました。

母が近くの眼科に連れていってくれ、もつと大きな、置賜総合病院に紹介状を書いてもらいました。子供には珍しい病気でその眼科では治りようできないと言われたのです。そして置賜総合病院に行きました。しかし、置賜総合病院に行っても治りようできなかつたので、山形大学医学部附属病院に行きま

した。そして、入院ということになりました。その頃には、全く見えず、ずっと白い世界に取り残されたように感じ、不安と恐怖でいっぱいだったことを今でも覚えています。

それから三週間ぐらいの入院生活が始まりました。毎日大量の点滴、採血、検査の連続で、音や声をたよりにする生活が一週間ぐらい続きました。この時僕は、見えないことでゲームや読書ができず、楽しみのない日が続きました。しばらくして、左目が見えるようになりました。その時、希望という光が見えた気がしました。頑張れば治るんだと勇気がわいてきました。しかし食欲がとて出るといふ薬の副作用もあって、食べる量を制限しなければなりません。毎日、母が栄養面に気遣って、食べすぎることをないようにしてくれました。しかし、その気持ちに反抗して口げんかをしてしまいました。今は反抗してしまったことを謝りたいと思っています。それでも治療だけは頑張ることができました。片目だけでも見える喜びを感じたからだと思います。退院する頃には、形や色がわかるようになりました。このように、形や色がわかるようになったのは、母や主治医の先生などのおかげだと思います。ようやく退院して学校に行くと、自分のことをみんな気遣ってくれました。身体が弱っている僕のためにクラス中であまり手洗いを声かけ合ってくれました。友達や先生が僕を支えてくれました。「大丈夫？」と声をかけてくれる友達もいました。光が戻ったこと、周りの支えのおかげで僕はとても強い力を得ることができました。

た。この時僕はやっといつもと同じ生活ができること、ほつとしていました。先生が喜んでくれたことに、僕は病気が治ったことが先生にとってもうれしかったとわかり、治してよかったと思いました。僕は、人と接することはとてもすばらしいことだと思えました。自分一人ではあきらめてしまうことが多い僕は、目の治りようをしていく中で優しさや何気ない言葉で勇気をもらうことがたくさんありました。

最近になって母に聞いた話なのですが、山形大学医学部附属病院では、僕の病気の症例があった兵庫医科大学病院の眼科の先生と連絡を取り合って、協力して僕の治りようを進めてくれたそうです。僕の知らない所でもたくさん人の力を借りて、僕の病気が治すことができました。

あの日、視力を急に失ってしまった時の不安や恐怖は忘れられません。普段当たり前にあるものを、急に失ってしまうこともあると知りました。予測できないことが突然起こるかもしれません。そんな時何かほんの少しでも支えになれる力になれる人になりたいです。

いつもの風景が見えるようになるという光を目指して努力することは簡単なことではありませんでした。でもこの経験を無駄にしないよう、目が見えなかった時の気持ちを忘れずに生きていきたいです。

僕は、たくさんの人に支えられて病気を治すことができ感謝しています。だから大人になった時、人の役に立つ仕事につきたいです。また、身近に困っている人がいたら手を差し伸べたいです。人を支えるには、僕のことを自分のことのように心配したり喜んでくれたりしたように、相手を思いやる気持ちをもち続けることを大切にしたいです。